

◆プログラム担当より

竹村治雄

プログラム委員長（大阪大学）

清川 清

プログラム副委員長（大阪大学）

本大会には、口頭発表177件、技術展示16件、作品展示7件、企業展示20件の申し込みがあった。プログラム担当は、主に講演発表の受付とプログラム編成、座長の選出と依頼を担当した。最終的には、177件の口頭発表を、35のセッションに構成し、最大4パラレルセッションとして実施した。講演トピックは学際的なVR分野を横断する幅広いものであり、学会の特徴がよく現れるものと成った。それぞれのセッションでの様子は、座長からの報告にゆだねることとし、プログラムに関する事項について以後報告する。

まずプログラム編成についてであるが、様々なプログラムとの兼ね合いでは、3日間の大会としてはこれがほぼ限界の講演数とも考えられる。したがって、今後は講演申し込み数がさらに増える場合は、講演時間の短縮あるいはセッションの並列度を上げるといった工夫が必要である。

次に、(株)ケー・ジー・ティーとクリスティ・デジタル・システムズの協力を得て、「3Dセッション」として立体プロジェクタを用いた発表を行えるセッションを初日に実施した。アナウンスが講演締め切り後となり、実際に立体プロジェクタを用いた発表は6件に留まったが、効果的に利用している発表が多く、今後盛んになると思わ



3Dセッションの様子

れる。ぜひ、来年度以降も継続を検討していただきたい。

そのほか、本年の大会の特徴的なことは、論文集をCD-ROM化したことと、発表申し込み締め切りを大会の10週間前、原稿の締め切りを大会の6週間前と例年より遅くしたことである。前者は、増え続ける発表件数のために論文集のページ数が増大し、会議期間中に持ち歩くことが困難となってきたことへの対応でもあるが、同時に電子化のメリットを生かした全文検索やカラーページへの対応も考慮して、実行委員会として実施したものである。大会はパラレルセッションであり、聴講する講演会場を選択するための一助としてアブストラクト集を添付し、参加者の便を図った。後者の申し込みスケジュールの期間短縮は、できる限り最新の研究成果を発表する場として、大会を大いに盛り上げることができる反面、論文集の編集時間が限られ、担当委員にはいろいろご迷惑をかける結果となった。この点については、今後の検討が必要であるが、編集を工夫することで改善が図られると考えられる。

◆企業展示担当より

柳田康幸

企業展示担当（ATR）

今村伊知郎

企業展示担当（ソリッドレイ研究所）

昨年まで「機器展示」と呼ばれていたカテゴリであるが、今大会は位置付けをより明確にするため「企業展示」に名称が統一された。

大会実行委員会結成当初、大会長の美濃先生から「過去、出展社でもある企業の方に任せきりのことがあったが、今大会は大学・研究機関側で全体をしっかり把握してやって欲しい」とご指導いただいた。しかし、やはり展示の実務を知り尽くした人が必要不可欠であり、結局、研究機関サイドの柳田、企業サイドの今村を中心にチームを進めることになった。連絡先の分散による混乱も心配されたが、大学・研究機関側と企業側のノウハウを融合して準備を進めることができた。

企業展示は本大会におけるスポンサー的な意味合いも強く、出展社数は大会の会計に大きく影響する。昨年の岐阜大会では15社出展とのことで、今大会の目標は昨